

2025 年度『学会賞』選考結果

学会賞選考委員長

安形麻理

三田図書館・情報学会賞は、会誌である Library and Information Science に掲載された優れた論文に与えられる賞です。本年度は、92 号、93 号に掲載された原著論文 3 編を対象に選考を行いました。さまざまな観点から厳正な審査を行った結果、以下の論文を学会賞として選考いたしました。

小川潤.(2025). 「行為 (Activity)」概念に基づく歴史研究プロセス構造化オントロジーの検討：歴史研究の再現性・再検証性の確保に向けて. Library and Information Science. 93, 1-22.

[授賞理由]

本論文は、歴史研究のデジタル化とデータ構造化において、「問いの設定、収集、解釈、叙述」に至る歴史研究のプロセスを包括的に研究対象とし、それをデータとして構造化する新たなオントロジーを提案するという意欲的なものである。研究プロセスを「行為 (Activity)」概念に基づいて捉え直し、「問題設定」「収集」「資料批判」「資料解釈」「総合・連結」「叙述」という 6 つの具体的な行為として体系的に定義した。

本研究が提案する構造化オントロジーは、事物の生成と来歴を記述する標準モデルである PROV Ontology を基本参照モデルとしつつ、歴史研究という特定ドメインの知識を精緻に記述すべく設計されている。これにより、暗黙知とされがちだった研究の各プロセスにおいて、どのような知識やデータが生成されたかの記述を可能にした。1 件の歴史研究論文を対象とした事例研究では、その記述から提案モデルに基づき構築したデータに SPARQL 検索を実行することで、特定の歴史叙述と根拠となる知識、典拠資料の連関を機械的に抽出できることを示し、歴史研究の再現性・再検証性の確保に向けた有用性を確認した。

他方、いくつかの課題も残る。第一に、歴史研究を一連の固定的な行為の集合として定義しているため、研究プロセスの動的、相互作用的な側面が考慮されていない。学術コミュニケーションに関する研究成果を参照することにより、今後の発展が期待される。第二に、2 人の歴史家の文献における記述にのみ依拠して研究プロセスを整理しているが、多様な研究プロセスをふまえて拡充することが可能であろう。第三に、有効性の検証が、筆者自身の歴史研究論文を事例に行われている点である。これは、暗黙知も記述するという目標からすると一定の意義をもつが、その妥当性や客観的評価には他者の研究プロセスへの適用を通じた検証が求められる。すなわち、本構造化モデルが歴史研究の再現性・再検証性を確保するための実現可能なオントロジーとして機能し得るのかという、本研究の意義に関わる課題だといえる。

しかしながら、こうした課題は、本論文の意義を大きく損なうものではなく、研究プロセスを構造化して記述するという新しい研究領域を切り拓くものとして、今後の研究の発展への期待も込めて、学会賞に値すると判断した。